プラトンを超えた統一存在論

第１部：脱プラトン

David Burton(米国ブリッジポート大学教授)

序論

原理講論について、私が初期の頃から関心を持っていたことの一つが、宗教と科学の統一は思想に関連しており、検討すべき課題が思想にあるということであった。原理講論の序論がこの点に関して、明解に述べている。

> 宗教と科学とは、人生の両面の無知を克服して両面の知に至る道を見出すべく両面の真理をそれぞれ探求する手段であったということを知ることができるのである。それゆえに、人間がこのような無知から完全に開放されて、本心の欲望が指向する善の方向へのみ進み、永遠の幸福を獲得するためには、宗教と科学とが統一された一つの課題として解決され、内外両面の真理が相通ずるようにならなければならないのである。[1]

宗教と科学の統一は、果たせればいいという次元の問題ではなく、我々にとっての重要なゴールだということが分かる。統一された一つの課題として解決されるべき問題なのである。このゴールを考えた時に、問題となるのは当然、どのようにその統一が成されるかである。

[1] 英語版　原理講論 (韓国ソウル　成和出版社　1996 年) 20 頁

宗教者に聞けば、変わる必要があるのは科学であり、宗教ではないと言う。神の存在、霊の存在、形而上学的な事象を受け入れない科学に非があると言う。科学的説明を宗教的思想に近づける試みがある。特に、その系統の人々は、好んで量子力学を研究対象とする。仮に科学がそのようなアプローチを受け入れると、科学的手法の核心に位置する実験の必要性を否定することになりかねない。形而上学と実験は水と油で一つになれない。科学を現存の宗教思想に近づけようと科学を変化させる試みは、科学にダメージを与える結果となる。従って、現存の伝統的宗教思想に寄り添うことだけでは科学との統一をもたらすのに十分ではない。宗教と科学という二つの領域を一つに統一するならば、科学だけを変化させるだけではたりず、それ以上のことをしなければいけない。宗教思想も変化させなければならない。原理講論の序論に書かれているように、可能であると私は信じている。ただし、科学と宗教の完全な調和は、科学と宗教の二つの領域が共有し認容する共通の存在論が提示されて初めて可能なのである。

科学と宗教の統一に向けた本論文の第１部として、科学と宗教間の既存問題の存在論的根源を明確にしたいと思う。科学と宗教の根源の相違を明らかにできれば、解決法が見出せると思う。本問題を明確化することが本論文の目的である。どんな解決法が考えうるかは、近々出版する本で述べたいと思う。本問題の根源は何なのかについては、本論文のタイトルを見ればお分かりかと思う。結論から言えば、原理講論と統一思想は、解決の基礎を提供している。以下、本問題を解決するために、根拠を挙げつつ説明していきたい。この内容は本でも述べるが、皆さんにプレビューということでお披露目したい。

伝統的哲学のパラダイム

アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドが西洋哲学全体をしてプラトン哲学のフットノート(補足、追加説明)だと論じたのは尤もなことだ。キリスト教哲学の伝統における存在論の基盤は、哲学的有神論に見られるように、ギリシャ哲学には他の哲学者もいるが、プラトン哲学か

ら始まり、それをアリストテレスが修正した流れになる。既存の宗教および哲学のパラダイムを概観するにあたり、彼らの特に存在論に簡潔にでも立ち返ってみなければならない。プラトンとアリストテレスの存在論は完全に一致してはいないものの、存在するものは、形相と質料から成立すると考える点では一致している。形相は、非物質のイデアまたはものの様式であり、質料は、ものの材料である。形相が形を与える前の質料は、それ自体、構造も動きもない無形の材料である。我々の言語はこの存在論を前提とするので、形のないものを実体がないと言う。全てのものが作られる根源質料を後に発展した他の概念と区別するためによく第１質料と呼ぶが、この存在論は物質の地位を完全に弱めてしまった。形相は形、構造、さらには生命や心までも第１質料に与えるアクティブな本質である。存在者の形相と第１質料を合わせることによって、伝統的パラダイムにおける存在の意味を根本的に理解することができる。

プラトンにとって、形相は最高のものである。プラトンによれば、形相は第１質料とは独立しており、時間を越えて永遠である。人間には魂があり、魂は心と同一視され、形相界で以前から存在した。魂という純粋状態では形相を直接に知覚できる。プラトンは、魂が体に入ることが、無秩序、不調和の原因であり、また形相をはっきりと知覚できない原因であるとする。魂は形相のようなものであるが、死後は体から離れ存在し続ける。伝統的なパラダイムを理解する上で最初に確認しなければならないのが、プラトン思想における形相と形相界という概念である。特に、非物質的存在を理解するのに必須である。また、プラトンの思想は心と体が別存在であることを前提とし、体の主体性が疑問視されるため、心によって支配されなければならないとする。

アリストテレスは、形相が質料から独立して存在するという考え方には同意しなかった。アリストテレスによれば、人間の魂は死と共に消え去ってしまう。形相から独立した存在である第１質料も人間が死ぬと無くなってしまう。しかし一方で、アリストテレスは、人間の感覚器

官で知覚できる次元を超えた存在があると述べている。アリストテレスは、感覚器官で知覚可能な性質を全て取り除くと、残るのは実体または本質であるという。我々はものの実体を直接には知覚しない。実体は、存在者の材料つまり第 1 質料と普遍的側面つまり形相からなる。例えば、木は、大きさ、形状、色、きめ等に違いがあるが、我々が即座に木と認識するものには普遍的な何かがある。形相という普遍的側面は、第 1 質料と合わさると、実体の一部となるのである。「実体」の原単語である Substance の接頭語 sub は低いという意味で、語根の stance は立っているという意味である。したがって、sub-stance or essence は知覚できるものの下にあるものを意味し、感覚器官で直に知覚できないもののの実体または本質を如何に知るかが、認識論における大きな哲学的課題であった。伝統的なパラダイムを理解する上で次におさえなければならないのが、アリストテレスの第 1 質料と実体概念である。

キリスト教神学に目を移してみよう。キリスト教神学は、プラトンの存在論とアリストテレスの存在論で理論構成されているのだが、アウグスティヌスとトマス･アキナスは特に重要な位置を占めている。アウグスティヌスはプラトン主義である。アウグスティヌスは、プラトンの形相界を神の説明に移行したが、そこで用いられたのが、視覚における光の役割に例えた照明理論である。当時、あるもののイメージを視覚でとらえるには、太陽光が対象物を照射し、対象物から反射した光が目に入ることが必要であると考えられた。アウグスティヌスはこの手法を用いて、認識および創造過程の両方において神の役割を説明することができた。これに関連して、アウグスティヌスは神の創造活動には 2 つの構成要素があると見ていたことが分かる。その 1 つは、第一質料という無からの創造である。もう 1 つ目は、無形の第一質料に形が与えられる照明のプロセスである。光によってイメージが可視化されるように、光と神のアナロジーを用いることによって、あたかもシールリング（認印付き指輪）の刻印のように、神の心の中の形が第一質料に刻まれることが説明される。

一方のトマス･アキナスは、アリストテレス学派である。トマス･アキナスは、神の説明としてアリストテレスの「不動の動者」を用いた。更に、トマス･アキナスは、アリストテレスの実体概念を神学と哲学に組み込んだ。このことは重要で、それにより古典的有神論における存在の意味を理解する上で実体的存在論が不可欠なものとなった。伝統的な哲学的有神論は多くの派に分かれるが、どれもトマス･アキナスから始まり、実体的存在論はいまもなおキリスト教教義の中に暗黙のうちに存在する。西洋における現代宗教の直感的知識および前提の基礎には、実体的存在論がある。実体的存在論の立場からは、神を含む全ての存在者は、実体と属性の合成体として存在する。実体とは、アリストテレスのいう第一質料の実体と形相の普遍相であり、属性は、存在者の知覚可能な性質である。属性は、実体のうちに内在すると言われている。属性は実体に内在すると言われている。これは、形相と質料の基本テーマについての一バリエーションである。二個の実体が一個のスペースを占めることはできない。従って、実体である神は完全に我々とは区別されなければならない。西洋思想における存在論の究極は、精神と肉体の二元論を説くデカルトの中に見ることができる。物質は、連続性のある（離散しない）実体であり、質（質量）と空間の広がりを有する。ほぼ実体ではあるが、第一質料ではない。物質はその質料と空間の広がりにおいて、幾分決定されたものであり、従って形相の普遍的側面を持つ。精神（魂）は実体であり、その実体は質（活動／生活／思考）をもつが空間の広がりを持たない。

トマス･アキナスの時代からの優勢な考え方ではあるが、この存在論は、科学を考慮しないこともあり、課題を内包していると言わざるをえない。論理的に完全に一貫しているとは言えない。根源にあるプラトン哲学とアリストテレス哲学の緊張関係から問題は生じている。プラトン哲学とアリストテレス哲学はどちらも、形相と第一質料から出発しているが、完全に一致しているわけではない。アリストテレスによれば、実体のみが独立して存在でき、実体には第一

質料が含まれる。アリストテレス哲学では、非物質的なものは独立して存在しない。一方、プラトン哲学における形相は非物質だが、独立して存在する。両方の哲学を論理的に一貫したものに纏める明確な枠組みは存在しない。このことによって、西洋哲学と西洋神学において曖昧さは不可避となる。この曖昧さは、精神（魂）の概念において顕著である。プラトン哲学では、形相は実体と看做されるので、精神（魂）はプラトン哲学でいう形相ではない。しかし、アリストテレス哲学でいう非物質的実体でもない。ではそれは一体何か？何世紀にもわたり、数多くの神学者や哲学者が、根源にある存在論概念に基づき議論を重ねて来た。プラトン哲学とアリストテレス哲学の緊張関係故に、本基本テーマについて微妙に異なる幾つかのバリエーションが生じた。バリエーションとアイデアの全てを分類する作業は必要ないが、少なくともカントまでは、西洋思想全ての源流には、形相、第一質料、実体で説明する根源的存在論があると考えられてきた。カントが 1804 年に死去することによって、それが新たな存在論への転換点となった。それを次節で見ていきたい。

パラダイムの打破 1：ジョン･ドルトン（John Dalton, イギリスの化学者、物理学者ならびに気象学者。原子説の提唱者）

化学は 18 世紀の終わりに確立された。1780 年頃、アントワーヌ・ラヴォアジエ（フランス出身の化学者。質量保存の法則を発見した）が実験を行い、化学反応の前後で物質の質量が変わらないことを発見した。

ラヴォアジエは、化学変化を起こす前と後では、反応に関する物質全体の質量は変化しないという質量保存の法則を提唱した。ラヴォアジエに続いたのが、ジョセフ・プルーストで、1800 年頃定比例の法則を提唱した。プルーストは、純粋な一つの化合物を組み立てている元素の質料比は常に一定であることを発見した。ドルトンは、これらの法則を説明するのに、西洋

哲学的有神論ではなくギリシャ哲学にその基礎を求めた。古代の原子論者が唱えた説を現代風に構成し直して、科学的バージョンを提唱し、既に確立した経験的法則を説明した。ドルトンの原子説理論は化学の基礎を確立し、定量的科学として発展した。彼は、存在論の根源が異なるため、科学と伝統的有神論が乖離していることに言及した。

ドルトンの原子説は最初、1804 年に発表された。ただし、化学の教科書には 1804 年ではなく 1808 年となっている。ドルトンは、素粒子をベースとしてものの存在を認知するアプローチを考えた初めての人ではなかった。ガリレオとニュートンが既にそのアプローチを取り入れていたが、それを重要視することはなかった。ドルトンは、首尾一貫した科学理論であると真摯に提案した最初の人物となった。ギリシャ原子説は原子は不可分と考えたが、ドルトンは原子をさらに細分化できるとし、素粒子から構成されているとした。ドルトン理論は、一つの例外を除き、今日の化学においても正しいとされている。原子説が一つの転換点となり、第一質料が形相によって形を与えられるという伝統的実体的パラダイムは打破された。ドルトン前は、いくつかのバリエーションはあったものの、形相、第一質料、実体に基づく、基本的に一つの存在論であった。ドルトンが原子説を発表したのとほぼ同時期にカントが亡くなるが、それはドルトンから新しい時代が始まるという転換期を意味しているであろう。ドルトン以後は、宗教的哲学的存在論とは一線を画する素粒子に基づく科学的存在論が登場する。

ドルトン以降、この素粒子をベースとした存在論は、科学界のほぼ全体で支持されるようになる。古典力学は、粒子と粒子間の力を扱う。熱力学は、ものの構成粒子の微視的行動に基づいて熱流を統計的に説明する。量子力学は基本的には、素粒子物理学の「標準モデル」で素粒子の挙動を説明する。標準モデルによる説明で、ものの存在を最もよく理解することができ、量子電気力学と量子色力学を一つに包括的に纏めることができる。素粒子をベースとする科学的存在論は、伝統的西洋思想に重大な影響をもたらした。科学的存在論は、その根源において、

プラトン存在論やアリストテレス存在論と両立しえないからである。プラントンとアリストテレスは、原子論を認めない。プラトン存在論とアリストテレス存在論では、非物質の形相によって形を与えられた連続的物質を必要とする。しかし、科学では、そのような連続的物質の存在は必要としない。そうなると、伝統的哲学的有神論の体系全体は、砂上の楼閣と化してしまう。形相、質料、実体を用いた理論基盤は崩壊し、まるで基礎のない砂上の楼閣を残すのみとなったのである。

我々は、宗教のコンテクストでの伝統的実体的存在論を超える必要があると科学は訴える。哲学的有神論をその基礎におく伝統的実体的存在論は、根本的に誤りである。この点については、意味することがある。形相と第一質料の二元論は、存在を説く一つの理論ではあるが、非物質形相とそれとは分離した物質の理論を言うのではない。一部分でも正当性が否定されれば、理論全体の正当性は自動的に崩れてしまう。また、デカルトの精神と物質、カントの仮想物と現象は伝統的思想の二元論であるが、これらは形相と第一質料から成る二元論の表現形式が異なったものに過ぎない。デカルトとカントの理論にも、非物質的な形相と物質的な第一質料の二重的側面があり、それが一つの理論を構成しており、両者の理論は類似する。形相と第一質量を用いての存在の説明が誤りであることが証明されれば、他の伝統的な二元論の正当性も否定される。各種二元論はそれぞれの理論を唱えるが、各理論の非物質的側面だけを保持することはできない。形而上学の概念も同様に、形相と第一質料の存在論から出てきたものなので、問題をはらむのである。

私は、原子説の影響は、素粒子存在論の影響と言った方がいいかもしれないが、宗教界で研究され、明確に理解されてきた。これは、少なくとも一部分においては、原子が存在することを実験で証明するのにかかる時間故なのかもしれない。ドルトンは、原子を実験で証明しなかったし、19 世紀を通して原子の存在を科学的に疑うことも可能であった。その 100 年後の 1905

年にようやく、アルバート･アインシュタインがブラウン運動の分析の中で、原子の存在を実験で証明した。

パラダイムの打破 2：原理講論

原理講論の存在論は素粒子存在論から始まる。

> これについて実例を挙げてみれば、今日、すべての物質の究極的構成要素といわれている素粒子は、みな、陽性、陰性、または陽性と陰性の中和による中性を帯びている。これらが二性性相の相対的関係を結ぶことによって、原子を形成するのである。さらに、原子も、陽性または陰性を帯びるようになるが、これらの二性性相が相対的関係を結ぶことによって、物質の分子を形成するのである。このように形成された物質は、また、互いに二性性相の相対的関係によって植物または動物に吸収されて、それらの栄養となるのである。[2]

原理講論は、科学と同様の方法を用いて存在の根源的説明をすることにより、伝統的哲学有神論を打破している。このことは、「新たな真理」となる重要なもので、科学と両立する可能性がある。しかし、原理講論には科学で明白に説明されていないものが加わっている。素粒子が互いに相互関係の中にあるという点である。素粒子間の関係性から存在が生じると説明する。このシンプルな関係概念が、伝統的実体的思想を葬り去る更なる一撃となるように思える。

素粒子との関係概念は、視点の大きな転換をもたらす。存在者はもはや連続的実体ではない。むしろ、上記引用にに記されるように、存在者は、素粒子間の関係の重なりを通じて存在する合成体である。物質は存在しない。実体はなく、素粒子と素粒子の関係層のみある。世間に広まった唯物論の概念にとっては受け入れ難いものである。宗教は、科学がもたらした成果は唯

[2] 同 42－43 頁。量子色力学の発展前に原理講論が書かれたので、強い核相互作用の **3** つの色荷については言及されていないことに留意されたい。

物的で無神論の立場に立つものだとして取り扱おうとしないので、原理講論が取り扱うのは意義深い。原理講論が提唱する新しい存在論では、科学がもたらした成果を宗教のコンテクストで扱うことを学ぶ必要性が出てくる。原理講論は創造原理で、さらにその先について言及している。これは実体的有神論を葬り去る更なる一撃となろう。

> 人間が永存することを念願するのは、それ自体の内に、このような永存性をもつ霊人体があるからである。この霊人体は生心（主体）と霊体（対象）の二性性相からなっている。[3]

霊人体が生活する所である霊界では、霊的五官により、有形世界と全く同じく感覚できる。

> したがって、被造世界には、人間の体のような有形実体世界ばかりでなく、その主体たる人間の心のような無形実体世界もまたあるのである。これを無形実体世界というのは、我々の生理的な五官では、それを感覚することができず、霊的五官だけでしか感覚することができないからである。霊的体験によれば、この無形世界は、霊的な五官により、有形世界と全く同じく感覚できる実体世界なので、この有形、無形の二つの実体世界を総合したものを、我々は天宙と呼ぶ。[4]

また、霊体が霊界に住むという視点は、伝統的実体的存在論とは全く相容れない。伝統的実体的存在論には魂も存在しない。霊体という概念が登場したので、ここで物質と魂の定義に立ち返る必要が出てくる。両者の定義に関して特に問題となるのは、物質は空間の広がりがあるのに対し、魂にはそれがないという点である。体は部分に分けられるもののみに適用される用語である。可分ならば、空間の広がりが必要である。物質は空間の広がりがあるので可分であり、肉体という概念は完全に受け入れ可能である。しかし、魂は空間の広がりはないので、不可分でなければならない。魂は不可分なので、体は魂には適用できない。従って、霊体という概念は、伝統的存在論の立場からは受け入れられない。それ以上に、伝統的実体的思想では、

---

[3] 同 86 頁。
[4] Ibid. 53.

霊界はあり得ない。原理講論に記されているように、霊界はまぎれもなく可分な世界なのである。

従って原理講論は、科学が提唱するものを継続して提唱し、さらに伝統的実体的存在論を克服する。伝統的実体的存在論では、魂と物質は存在しない。形相と第一質量は存在しない。伝統的実体的存在論は、原理講論がいう素粒子の関係構造や霊体および霊界を概念的に説明できない。単純に言ってしまえば、伝統的実体的存在論にはそのような用語が存在しない。更に、用語が別の問題の基礎ともなっているのである。現在、原理講論の存在論を適切に説明する哲学的用語がなく、従って、伝統的有神論に見られる用語の多くを使っている現状がある。問題なのは、原理講論が意味の差異を明確に定義せずにそれらの用語を使用していることであり、伝統的実体的思想のレンズを通して原理講論を解釈してしまっている点である。これらの点は、統一思想にも当てはまる重要な問題である。

統一思想に関する考察

原理講論では、存在論について非常に簡単にしか書かれていない。第一章の数ページに留まるが、全体の基礎となる部分である。全てはそこに由来する。また、体系的、学究的な内容というよりは、教育的な内容となっている。必要最小限のものが提供されているのみで、それらは十分とは言えず肉付けが必要である。原理講論に理論的説明を補足しているという点で、統一思想は非常に重要である。一見すると、宗教と科学の統一という問題に対して、統一思想を原理講論の直接的拡張として適用できるように思える。しかし、統一思想をより深く掘り下げてみると、まずもって解決しなければならない別の問題が存在することに気付く。李相憲先生は、統一思想を伝統的西洋哲学の有神論のコンテクストに置いている。それゆえ統一思想には、存在論、認識論、価値論などの章がある。しかし、西洋哲学のコンテクストを使用するだけな

らまだしも、統一思想の最初の原理を説明する際に、李相憲先生は伝統的実体存在論を組み込んでいる。

> アリストテレス（Aristotelés, 384-322 B.C.）によれば、実体は形相（eidos）と質料（hylé）から成っている。形相とは実体をしてまさにそのようにせしめている本質をいい、質料は実体を成している素材をいう。西洋哲学の基本的な概念となったアリストテレスの形相と質料は統一思想の性相と形状に相当する。[5]

統一思想と形相･第一質料を李相憲先生は明らかに結合させている。李相憲先生がその両者を結合させたことにより、原理講論と統一思想が乖離してしまったのである。李相憲先生は伝統的な視点で問題を認識しているが、明白にも性相と形状を伝統的な用語の意味で用いて、問題を解決している。

> このように西洋思想がとらえた形相と質料、または精神と物質の概念には、説明の困難な問題があったのである。このような難点を解決したのが統一思想の性相と形状の概念、すなわち「本性相と本形状は同一なる本質的要素の二つの表現態である」という理論である。[6]

また李相憲先生は、神の本形状を第一質料と看做している。

> このように水が無形なのは、実はいかなる容器の形態にも応ずる無限の応形性を持っているからである。すなわち水が無形なのは実は無限形であるためである。同様に、神の本形状も、それ自体は一定の形態がないが、いかなる形態の映像にも応ずることのできる応形性、すなわち無限応形性をもっているのである。このように被造物の有形的要素の根本原因には素材的要素と無限応形成の二つがあるが、この二つがまさに神の形状の内容である。[7]

李相憲先生は、第一質量を神の本形状として採用する中で、物質の照明（以下を参照）を用いるアウグスティヌスによる説明と同種の方法で神の創造を説明する。アウグスティヌスは照明

---

[5] 新版　統一思想要綱　李相憲著（光言社 2006）38 頁
[6] 同 39 頁
[7] 同 32 頁

説で、形のない第一質量に形を組み入れる。アウグスティヌスと類似する背後には、形相と第一質量を用いた存在論をベースとする根本概念との類似性がある。

李相憲先生は、伝統的哲学的思想に見られる課題を解決しようとする。しかし、伝統的実体的存在論を組み入れる中で李相憲先生は、原理講論（と関連するが）と異なる思想を創りだしてしまった。このことが統一思想全体に見られる。例えば、統一思想は、陽陰の二性性相の説明を原理講論とは異なるものに変えてしまった。

> … 被造世界では性相と形状は共に実体の性格をもっており、陽性と陰性は実体としての性相と形状（またはその合性体である個体）の属性となっている。[8]

この説明は、東洋思想および原理講論の陽陰の説明とは異なる。東洋思想および原理講論には、西洋思想に見られる実体と属性という哲学的概念は含まれない。李相憲先生は、創造世界に存在する性相形状概念を実体と看做しているが、その実体は精神（魂）と物質という実体と同じもの見られる。伝統的実体的思想の問題を解決する良い試みではあるが、最終的には、原理講論と統一思想の間に存在論的ギャップが存在する結果を作り出してしまった。このギャップは、科学と哲学的有神論の間の存在論的ギャップとほぼ同じものである。事実、統一思想と原理講論の間にある差異を露呈する結果となってしまった。その差異は、私に言わせれば、本論文で論じたように、科学と宗教の間にある差異と同じものである。このことは、問題の性質と我々の責務を如何に達成するかまで変えてしまう。

統一思想のコンテクストで宗教と科学の関係に直接触れるよりもむしろ、宗教と科学の統一を証明することで、原理講論と統一思想を統一することになる。科学と共通の存在論を発展させるために我々はまず、伝統的実体的哲学的有神論に頼らない共通の統一存在論を、統一思想

[8] 同 42 頁

のコンテクストの中で発展させなければならない。我々にはプラトン哲学を用いない統一哲学が必要である。更なる研究で、科学とより明確な連携もはかれる。私がブックプロジェクトで果たしたい目的はこのことであり、また私は伝統的実体的存在論がもたらした影響を統一思想のコンテクストの中で明らかにしようと試みている。そして、二性性相の原理と素粒子存在論のコンテクストにおける関係から纏めようとしている。

概観：衝突理論

衝突理論のアプローチによって最も影響を受ける統一思想の領域の一つは、ものの変化がなぜ生じるのかの説明である。李相憲先生は、永続性と変化の両方を説明するのに、自同的四位基台と発展的四位基台を区別される。この考え方は根拠があり正しく、重要な視点である。李相憲先生は、原相論の中で、発展的四位基台について基本的な説明をしておられる。次の一節は、李相憲先生が外的発展的四位基台について説明された原相論の一部分である。

> それでは授受作用の具体的な内容を説明することにする。重畳した状態での授受作用とは、本形状である前エネルギーが本性相内に形成された構想（ロゴス）の鋳型（霊的鋳型）の中にしみ込むということである。先に述べたように、本性相内の内的授受作用の初段階において形成された緻密な内部構造を備えた新生観念としての鋳型性観念が、次の段階で心情の衝動によって生命を賦与されて現れたものが完成した構想であった。この完成した構想は生命をもつ鋳型性観念であり、生きている鋳型である。この鋳型は初期段階の緻密な内部構造を備えた鋳型性観念が後期段階で活力を与えられたものである。しかしいくら活力を与えられたとしても、そしていくら内部構造が緻密であるとしても、鋳型（霊的鋳型）であることには違いない。したがって、実際の鋳型に鉄の融解液を注入して鉄製品を造る場合と同じく、この鋳型性観念の中にも必ず融解液に相当する本形状の質料（前エネルギー）が注入されうる空間があるようになっているのである。[9]

[9] 同 80 頁

この一節から我々は、李相憲先生による発展的四位基台についての説明が、形相と質料を用いた存在論に直接的に由来することが分かる。非物質の形相であるロゴスは、生命、活力、構造を持つ。本形状は第一質料であり、ここでは形状のない前エネルギーと呼ばれている。外的発展的四位基台で、第一質料に形が与えられ、結果として存在者となる。これは、アウグスティヌスによる第一質料の照明と類似する。原相論のコンテクストではそのように説明できても、我々の観察する存在者は、連続的な第一質量が形相によって形づくられたものではない。従って、原相論での変化の説明を、存在者における変化に直に適用することはできない。従って、統一思想は、存在者における変化に適用しておらず、存在者には変化が生じることを述べるに留まっている。統一思想は、存在者に変化を生じさせる発展的四位基台について明確な説明も定義もしていない。説明のギャップがあると言わざるを得ない。

化学において最も関心の高い変化の型は、化学変化である。化学変化とは、変化に伴い化合物が形成されることである。例えば、炭酸水素ナトリウム（重曹）に酢を加えると、二酸化炭素がつくられて沢山の泡が出る。元の材料とは別の酢酸ナトリウム、二酸化炭素、水が生成される。泡立つことは化学変化の前兆現象で、酢酸（酢の中の活性化合物）と炭酸水素ナトリウムの塩基特性が化学的性質である。衝突理論と呼ばれる運動分子理論まで拡張すれば、上の例のような全ての化学変化は、反応しあう分子、イオン、原子間の衝突によって生じることが分かる。上の例では、酢酸からの水素イオンと重炭酸塩イオンが衝突して、化学変化が生じることになる。衝突なしでは化学反応がなく、従って化学変化もない。

化学における衝突理論は、素粒子存在論との関連で化学変化を説明する概念的基礎を我々に提供する。化学変化は化学反応式によって表わされる。本ケースでは、酢酸(CH_3COOH)は炭酸水素ナトリウム($NaHCO_3$)と化学反応を起こし、酢酸ナトリウム($NaCH_3COO$)、二酸化炭素(CO_2)、水(H_2O)が生成される。

$$CH_3COOH(aq) + NaHCO_3(s) \rightarrow NaCH_3COO(aq) + CO_2(g) + H_2O(l)$$

この化学方程式においては、左側にあるのが化学変化前の反応物であり関係維持性を有する。右側にあるのが化学変化後の生成物であり、関係維持性を有する。左側と右側は矢印によって結ばれているが、矢印は化学変化の方向を示している。矢印は衝突を表しており、衝突が起きると、発展的相互作用が化合物内の関係パターンを変化させる。つまり衝突によって化学変化が生じるのである。発展的四位基台は主として衝突における相互作用を表す。これは関係維持の性質とは異なり、形のない第一質量に形を与えることとも本質的に異なる。発展的衝突は、素粒子内の関係を維持する性質を変化させ、変化前と変化後の状態を連結する。

結論

過去 2000 年間、プラトン思想が西洋では支配的で、ヒトの発育と宗教思想にとって極めて重要な存在であった。しかし、最近の 200 年間で我々の宇宙に対する理解は急速に深まった。形状のない第一質量に形相が形を与えると理解されるプラトンの存在論は、ものがどのように存在するのかの説明とはなっていない。従って、伝統的な哲学的有神論は、その基盤とする存在論において根本的な欠陥を有することになる。我々が原理講論の存在論を理解し解釈するのに、哲学的有神論を拠りどころとすることはできない。現代的考察において、プラトンの存在論が積極的に議論されるべき時代はとうに過ぎ去った。必要なのは、原理講論や科学により提唱された全く新しいアプローチなのである。素粒子に基づく存在論は、哲学的有神論に固有の問題を克服し、素粒子間の関係概念を追加することによって、存在と、さらには科学的説明と繋がった変化について説明がなされることになる。素粒子間の衝突を通じて起こるかかる変化は、化学を超えて適用可能である。つまり、科学では一般的に、存在者における変化は、素粒子間の衝突によって生じるとされる。私は、素粒子間の関係を対象とした本存在論こそが、科学と

宗教を統一された一つの課題として解決するという原理講論のゴールを達成する基礎を提供してくれるものと信じている。